

◎特集

情熱の赤



のとキシマツツジでの地域おこしに情熱を燃やす「NPO のとキシマツツジの郷」の皆さん

連絡協議会から NPO 法人設立へ

「第1回目の開催が一番苦しかった」。宮本康一さん（74）
Ⅱ笹川・右写真真中央Ⅱは、今年で6年目の開催を終えた『のとキシマツツジフェスティバル』を振り返る。

「のとキシマツツジを誰も知らない。どれだけ人が来てくれるか分からない。許可もなかなか下りないという状況。とにかく安全を最優先に展示した」
イベントは宮本さんが会長を務める『のとキシマツツジ連絡協議会』が主催する。初年度は3日間で延べ1万人以上が来場。大きな反響を呼び、関係者を驚かせた。6年目も1万2千人が訪れたという。

このフェスティバルの反響が、倉重祐二氏（新潟県立植物園副園長）と小林伸雄氏（島根大学生物資源科学部教授）という2人の専門家による学術調査につながった。

連絡協議会は「のとキシマツツジの情報を共有しよう」と宮本さんが能登半島全域に呼び

掛けて組織した団体。フェスティバル開催のほか、ポスター制作、写真集発行などの事業を行ってきた。

「連絡協議会は広域ゆえに会員を集めることも大変で意見の集約が難しい。世間からは趣味の団体という見方も強かった」
宮本さんは連絡協議会の活動に壁を感じるようになった。

そんなとき、NPO（特定非営利活動団体）を設立すればどうかというアドバイスを受ける。「NPOにすることで、組織としてしっかりするし、社会の信用も上がる。さらにスムーズに事業を進めることもできるようになる」とNPO設立の経緯を語る。

平成21年4月、宮本さんは有志24人と共に『NPO 法人ののとキシマツツジの郷』を設立。自身が理事長となつて会員をまとめることを決意した。

のとキシマツツジを 守り、育てる

のとキシマツツジを核とした地域おこしをその目的に掲げるNPO。まずはのとキシマ

ツツジを守り、育てることに着手した。

「倉重、小林両先生の協力を得て、6種類ののとキシマツツジの挿し芽の技術を学び、植えるノウハワを確立する。のとキシマツツジを増やし、培った技術を提供しながら植樹や販売へとつなげたい。挿し芽からものになるまでは5年以上かかるが、種木を厳選することでブランド化も進めたい」と展望を語る。

日本一の古木群 世界遺産登録を目指す

NPOは、のとキシマツツジを活用した商品開発も考えている。「花の成分分析が必要になるが、安心して口にできることが分かれば、どこにもない物ができる。現在はさまざまな業種に参加を呼び掛けている状態」なのだという。

県外への発信にも力を入れる。今年3月、新宿御苑でのとキシマツツジ展を開催。来年は神奈川県立フラワーセンター大船植物園での開催が予定されている。

「年々、のとキシマツツジ

を目的として能登に来る人が増えている。のとキシマツツジの赤には人を引きつける魅力がある」と宮本さんは確信している。のとキシマツツジを取り巻く環境は、イベント開催に苦勞した6年前とは違う。

「学術調査の結果、キシマツツジ古木群として、能登半島は日本一の規模を誇ることが分かった。能登で独自に発達した品種も確認された。夢はのとキシマツツジ古木群が世界遺産に登録されること」

能登に眠る原石を みんなで磨いてほしい

「のとキシマツツジだけではなく、能登には磨けば光る原石が足元にたくさん転がっている。多くの人が地域おこしに参加し、みんなで原石を磨いてほしい」と話す宮本さん。のとキシマツツジという原石を、情熱という心で磨き続けてきた。

『能登』を愛し、『能登』にこだわる『能登人』の情熱は、のとキシマツツジのように赤く燃え上がっている。





小林伸雄

島根大学生物資源科学部教授

【PROFILE】 しばやし・のぶお

1968年新潟県生まれ。筑波大学博士課程農学研究科修了、博士（農学）。97年から「国指定名勝つつじが岡公園」（群馬県館林市）でつつじ古木の保護管理や新品種育成に携わる。2000年からJICA 専門家としてアルゼンチン園芸開発計画に参画。03年、京都大学助手を経て島根大学生物資源科学部助教授に就任。10年同教授。専門研究分野は園芸植物の品種改良、植物遺伝資源の評価と利用、DNA マーカーなどを用いた野生植物から園芸植物の成立起源解明など。

平成18年、二人の研究者によつてのとキリシマツツジの学術調査が始まった。今回、5年目の調査のため能登を訪れた二人に、のとキリシマの価値を聞いた。



倉重祐二

新潟県立植物園副園長

【PROFILE】 くらしげ・ゆうじ

1961年神奈川県生まれ。千葉大学大学院園芸学研究科修士課程修了。赤城自然園（群馬県）に勤務後、現在は新潟県立植物園副園長。専門はつつじ属の栽培保全や系統進化、花卉園芸文化史。著書に「NHK 趣味の園芸 よくわかる栽培 12 カ月 シャクナゲ」（NHK 出版）、「日本産つつじ・シャクナゲ大図譜（改訂増補）」（誠文堂新光社）、「日本の植物園における生物多様性保全」（共編著 日本植物園協会）など。その他、寄稿記事、学術論文多数。

のとキリシマの価値は—。

Special
Interview



—INTERVIEW—

杉野深雪さん（右）・久美子さん＝金沢市＝

のとキリシマツツジの鮮やかな赤色が、目に飛び込んでくるようでした。どの家にもあって、町全体で大切に盛上げているのが分かりました。



吉田義幸さん（中）・明美さん・博人くん＝小松市＝



200年、300年という大きな古木があることに驚きました。ピンク色のキリシマは初めて見ましたがすばらしかったです。

田中和男さん（右）・鈴子さん＝金沢市＝

のとキリシマツツジは一度見てみたいと思っていました。普通のつつじよりも花がきれい、とても見応えがありました。



このような企画を今後も続けてほしいと思います。

庭先で数百年—。
のとキリシマツツジを
巡ることは、
守り続けた能登人の
情熱に触れること。

のとキリシマツツジ探訪ウオーク

のとキリシマツツジを巡りながらウオーキングを楽しむ「のとキリシマツツジ探訪ウオーク（テレビ金沢主催）」が5月9日、柳田地区で実施された。今年初めての企画に県内から225人が応募。抽選で選ばれた小学5年生から75歳までの85人が参加した。午前10時、大型バス2台が五十里集会所に到着。入念な準備運動のあと、5・5キロ、4軒のオープンガーデンを巡るウオーキングに出発した。開花の遅れが心配されたのとキリシマツツジは、9日現在で

八分咲きから満開を迎えていた。参加者は新緑のとキリシマツツジを楽しみながらさわやかな汗を流した。各オープンガーデンでは、家主やNPOのとキリシマツツジの郷メンバーが品種や由来などを説明。参加者は真剣に耳を傾け、この地で数百年にわたって大切に育てられてきたのとキリシマツツジに思いをはせていた。探訪ウオークを企画したテレビ金沢の石井慎二事業部課長は「のとキリシマツツジの赤は人を引きつける。来年もぜひ実施したい」と話していた。

―のとキリシマとは。

小林 ツツジの分類の中で、江戸キリシマという品種があります。その江戸キリシマの中で能登にあるものを「のとキリシマ」と呼びます。

倉重 もともとは、正保年間（1644年から1648年）に九州の霧島山から大阪を経由して5本に分けられ、そのうちの3本が江戸に入ったんです。その3本が江戸で増やされて、いろいろな品種ができました。これを江戸キリシマと呼び、この江戸キリシマが能登に入ってきたんだろうと思います。

―学術調査を行った理由は。

倉 最初は宮本さんが県立大学に調査をお願いして、専門ではないということで回り回ってわたしに話がありました。

小 ツツジ専門の研究者というのは非常に少なくて、関東系の園芸品種をやっているのはわたしと倉重さんだけなんです。

倉 宮本さんからは「自分たちはすごいと思っている。とにかく来てくれ」という話でした。植物園にはそういう電話がよく

ありますが99%はたいしたことありません。あまりにも宮本さんが熱心なので、「聞いたことないけど行ってみるか」と小林さんを誘って能登に行きました。最初はあまり期待はしていませんでした。

―初めて能登入りした印象は。

小 わたしは以前、館林市の職員として「つつじが岡公園」に勤めていて、キリシマツツジはここにしかないだろうと思っていました。ところが能登は農家に1本1本あるというスタイル。なんでこんなに大きいキリシマがこれほどたくさんあるんだとびっくりしました。

倉 能登の特徴は、木の大きさと品種の多さです。個人の家にあるというのもほかにはない特徴と言えます。

小 能登の風景もすばらしいと思いました。黒い瓦の大きな家が新緑の田んぼの間にあって、裏庭には真っ赤なキリシマが咲いている。こんなきれいな場所はほかにはないですね。

倉 裏庭にあって近所の人にも知られていないことがあるというのも面白いですね。



五十里ののとキリシマツツジ（酒井家）

能登は日本一の集積地。
地域全体で守る必要がある。



以外の系統の中に、能登独自のものがある可能性があります。皆さんが「これがキリシマだ」と思っていたものは、実はどこにもあるもので、逆に「価値がない」と思っていたものが貴重な品種なのかもしれません。これらすべてを含めてのとキリシマと呼んでいいと思います。

倉 能登の調査から始まって全国各地を比較してみることで、日本の園芸文化がどのように広がったのかという、今まで誰も調査したことがない大きなテーマも出てきています。

小 能登には祭りなど独特の文化が残っていますが、キリシマも能登独自の文化と言えるのではないのでしょうか。

倉 10年、20年ではなく、100年以上守られてきたということは地域に根付いた文化そのものです。これからも地域で大切に残していかなければいけないものです。

小 わたしは海外の学会で発表するときには必ずのとキリシマの写真を見せるんですが、もう驚くしかないという状況です。専門家がびっくりするくらいの価値をもつとアピールするべき

のとキリシマは能登独自の文化。
地元がもっと価値を知るべき。



小 江戸で発達したはずのキリシマが、なぜ能登半島の端っこにあるのか調査してみようという事になったんです。

倉 江戸や京都、大阪に残っているのなら分かりますが、なぜ「能登」なんだろうというところがスタートでした。

―何を調査したのか。

倉 のとキリシマがどこから来たのかというルートと、能登独自の品種があるのかということです。さらにどの地域にどれだけ

のものがあるか明らかにしていこうということでした。

小 DNAを調べてみると、集落ごとに同じような品種が分布しています。半島の山の中に、このような花を愛する文化があったということもすばらしいなと思います。

倉 樹齢100年以上の古木が地域に300株以上あるというところは能登以外にありません。日本にないことは世界にもないんです。本当によく残してきたなと思います。

ですし、地元の人にも分かっているように思います。

倉 あの赤の濃さと木の大きさをを見ると、よそから来た人は驚くでしょう。江戸の園芸は当時世界最高水準でしたが、その中でもキリシマは頂点でした。

小 300年、400年という時間はお金では買えません。能登全体で計算すれば、ばく大な価値になりますね。

―住民へのメッセージを。

倉 のとキリシマは個人の物であって個人のものではないところがあります。持っていない人は関係ないのではなく、地域の文化的財産として認識して、皆さんが興味をもって積極的に参加することが将来につながるのだと思います。

小 今、のとキリシマが注目されている時代に各戸に1本ずつ植えればいいと思います。それが次の100年後につながります。いい条件で植えれば、300年400年育つことが保障されている場所ですから。江戸時代のキリシマブームを、能登でもう一度つくる良い機会なのではないでしょうか。

のとキリシマツツジの
主な品種

【本霧島】



光沢のある濃い赤色。葉は濃緑で光沢がある。立性。

【二順霧島】



本霧島のがくが不完全に花弁化した品種。がくは白から徐々に紅色に変化する。

【養霧島】



本霧島のがくが不完全に花弁化。がくは花後も比較的長く残る。

【八重霧島】



がくが完全に花弁化。

【紫霧島】



紫の花色。株は横開する。

【けら性一重】新しい系統



花色に変異あり。品種名不詳。

【けら性二重】新しい系統



ピンクから濃朱赤まで。二重。



わが子を 慈しむように――

ばんねんじ
～のとキリシマ花の寺・萬年寺～



住職
久保獻令さん
くぼ・けんりょう

のとキリシマ寺の誕生

「自然界の神仏でもある草花に癒され、心なぐさめる花の寺でありたい」。花の名所として知られる奥能登の12寺院で組織する『能登花の寺心華会』。その事務局を務める『のとキリシマ花の寺・萬年寺』の住職、久保獻令さん（65）＝七見＝は花の寺への思いを語る。

萬年寺の露地には、樹齢200年以上ののとキリシマツジがある。この木は、旧能都町が町の花として増やした種木として知られる。

「のとキリシマへの思いは特別。退職を機に境内をキリシマ園にしようと考えた」と振り返る久保さん。平成17年4月から2年6カ月かけて境内を整備。広大な敷地には約300株ののとキリシマツジが絶妙な配置で植樹されている。

「のとキリシマで埋め尽くすのではなく、キリシマの古木と若木、そして木立と石組みのバランスを庭師と相談しながら植えている」という。

境内にはほかに、ヒラドツ

ツジやサツキ、ツバキなどの花のほか、樹齢300年の藤の木やコウヤマキなどがあり、見どころは盛りだくさんだ。

わが子のようなキリシマ

広大な敷地にさまざまな花木が植えられている萬年寺。その手入れや管理には大きな労力が必要だ。「手入れは大変だが、訪れた人から『広い庭全体に草も落ち葉も散らばっていない』と言われることが何より報われる」と久保さんは目を細める。

特にのとキリシマツジには「わが子を慈しむように」細心の注意を払っているという。それでも毎年同じようには咲いてくれない。

「今年の花はあまり良くなかった。雪や低温の影響があったのかもしいないし、コケ取りが不十分だった部分もある。のとキリシマを育てるには、まだまだ勉強しなければいけないことがたくさんある」

毎年20株以上増やしているという萬年寺。能登を代表する花の寺として、久保さんと共に年々進化していく。

【取材を終えて】

これほど人の心を魅了する『赤』があるだろうか。
毎年、満開ののとキリシマツジを見ると感じる思い。

「のとキリシマツジは園芸品種。花の美しさは自生するキリシマツジとはまったく違う」と宮本康一さんが話していた。

300年、400年以上といわれる古木の樹齢。

江戸時代、能登半島にこれだけの園芸文化があったことに驚く。
時間はお金では買えない。

数百年の時を経て、見事な花を咲かせるのとキリシマツジはかけがえない能登の宝だ。

情熱半島『能登』。

のとキリシマツジは『情熱の赤』。町花のとキリシマツジをみんな育てませんか。

100年後の能登が、今よりもさらに燃え上がるように――。

のとキリシマツジを守るために。
百年後の能登のために。
できることがある。